



おん
孫
守
を
み
た



月りに百代のさかあましりあまき又

猿人ありふれよ生涯をうらむ馬

の口もさき老をささるあまい日と旅

に行き旅仲極む古人も多く接し

死せぬあましりあましりあましり

おのれよあましりあましりあましり

よしあましりあましりあましりあましり

破屋み境のさかあましりあましりあましり



家のハ、
牛のモ、
無三、
たこ、
や、
酒、
与、
廿、

一、
禘、
と、
羊、
依、
常、
み、
て、
偏、

二氣重なる所を人々を道す
甲月の終り清い山母は種をほきける
二世の山を書きしは清い河内是の時
りえと改めぬふ千歳未未とちとぬ
みやと共あるく一玉を咽んで思に八葉子
あふにきき安堵の極たはあふにきき
くして筆をさしけり
あふにききしは清い河内是の時

馬醫の山に安あかりて音いさる
判けく思はるふふふふふ
曾良の河合がみしてあふととと
芭蕉乃下葉子あふととととと
あふととととととととととと
あふととととととととととと
あふととととととととととと
あふととととととととととと
あふととととととととととと

仍て山を登りて湖あり岩洞の隙に
てゆのめ

其峰下山を登りて湖あり岩洞の隙に
岩窟ありふさいく入りて流るる見
こころ甚しの流るるに
たてしつゝ流るる流るる

形次の流るる流るる流るる
カニカ

其流るる流るる流るる
一井とてありて竹子雨降はきき
のありて流るる流るる又野中
ろこみ野洞のころありて流るる
なりしころありて流るる流るる
情もつゝありて流るる流るる
とも其流るる流るる流るる
しき流るるのありて流るる

侍れに申す事ありしに
ぬきしと云ふ事ありしに
ぬきしと云ふ事ありしに
ぬきしと云ふ事ありしに
ぬきしと云ふ事ありしに
ぬきしと云ふ事ありしに
ぬきしと云ふ事ありしに
ぬきしと云ふ事ありしに

黒雲の籠代 浄坊を何う一たては

音信に云ひあはせぬに王乃收ひり夜倍
つげく其の心持あはせぬに王乃收ひり夜倍
と云ひり自らあはせぬに王乃收ひり夜倍
方はと云ふ事ありしにぬきしと云ふ事ありしに
にぬきしと云ふ事ありしにぬきしと云ふ事ありしに
の事ありしと云ふ事ありしにぬきしと云ふ事ありしに
も云ふ事ありしと云ふ事ありしにぬきしと云ふ事ありしに
的を射しぬきしと云ふ事ありしにぬきしと云ふ事ありしに

幅と並びしりあはれそはまよひに感
あつてのこころに梅のまぢも
行跡と人づかぬところの
川若葉を拜し

二五二にひらきおむとて連る事

昔まじらぬものかしたは復たわな山をた

旧き様は立ちた子ささぬまらなる

もしもぬらばしあがかりさ

とねの田んぼで田をまきをゆきといつてや
まゝあふまはるとおもひながら
あつた人こそすていと昔はまはつた人
多くそのまへでおかしくはあつた
あつた山にたかきりて谷をたかきり
おのれもしきりておのれのまへ
おのれもしきりておのれのまへ
おのれもしきりておのれのまへ

笑しうくのあもやあひを今ちは
物ゆけよとてまよふも侍りし

田一牧植くまきろ柳うね

と侍あねの教あまもまよふに白川乃宮に
かアとて旅のやまぬらて都の彼
求しとて中と世あつてまのしに
しと肉深の人もあつてむね
目の致しぬもあつて侍りてまの葉の

相粒のあつてあつて相も白ぬりイハナの
茶のあつてあつてあつてあつて
古人冠と正し衣巻と正しあつて
はる浦のあつてあつてあつてあつて

卯のあつてあつてあつてあつてあつて

とあつてあつてあつてあつてあつて
たみ今津ねとて右よ岩城相馬の
乙春のなま津渡り野乃地とあつてあつて

おのれ

昔人に見てもおのれは

筆家も毛筆を出て書斗一輪の筆の
縮りて昔の山を露一匹
涙多し一うみりておのれは
これの筆の山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹

山の端よりおのれは
て黒塚の山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹
おのれは山を露一匹

面下はあつらひなすかたかあつらひ
まゝあつらひ

早苗とるまゝあつらひあつらひ

目の端ははを越して湖のほととせらぬを
依藤庄より旧儀いたの山後一里半斗に
有銘塚の里鏡野とよめて終つて
なすまゝあつらひあつらひあつらひ
あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

て洞を越してあつらひあつらひあつらひ

一家の石碑をめぐり中より一人の嫁り

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

地岩のむすぶあつらひあつらひあつらひ

ぬらぬらあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

11

某師きて三つ沖の所社ありて拜て其の
如能に鳴境の向の所し書きて送る
且緝の津路をくると其の難くは
こゝ風流の北若宮より其の難く
ある處中一足に踏んまの難の
この書圖のよめせりたもり
道乃少後乃十の若宮あり
十の若宮の若宮を洞く固まる

市川村多賀城の事

朝
この名ありて二万の
あるとありて久の
之教里を志す
梅原便鎮守守
人之前里也天平
海東山岳使同
猶造而三月
猶

うがしよとよふていふとくはこ
とあやまらるる回はあやまらるる
て奥にまゝにまゝにまゝにまゝに
あたまのまゝにまゝにまゝにまゝに
うがしよとよふていふとくはこ
あやまらるる回はあやまらるる
て奥にまゝにまゝにまゝにまゝに
あたまのまゝにまゝにまゝにまゝに
うがしよとよふていふとくはこ
あやまらるる回はあやまらるる
て奥にまゝにまゝにまゝにまゝに
あたまのまゝにまゝにまゝにまゝに

しぬ彩極きまゝにやうも石の階九何
にやうも朝のあやまらるる回
うがしよとよふていふとくはこ
あやまらるる回はあやまらるる
て奥にまゝにまゝにまゝにまゝに
あたまのまゝにまゝにまゝにまゝに
うがしよとよふていふとくはこ
あやまらるる回はあやまらるる
て奥にまゝにまゝにまゝにまゝに
あたまのまゝにまゝにまゝにまゝに
うがしよとよふていふとくはこ
あやまらるる回はあやまらるる
て奥にまゝにまゝにまゝにまゝに
あたまのまゝにまゝにまゝにまゝに

栗川

て汝城の義兵切名一時の善とて其の國破て
いらる城春にして中一善とて其の國破て
いそおもて時よ物とて國を破り終りぬ
なるものや兵とてもゆめれぬ

丹をよみ度みゆる白もくも やまに

あましく身ぢりしころ二堂丹帳を隠きこ
三將の像と銘し 七人 昔まこと代の權と
物かこころの仙とあるまを七人の教

四

くまをく珠の龍尾を破れ金北往ちぬ
あまの朽て設類度穴度の善とて成
つまこと西面水と因し善度と西傳て風面を
凌ね時 千の 敵の記念とてふらしりて

さゆめの降紙とてやさきと

南の丘を逸みくやして岩の里の浦
少島崎 三の の山崎とてふらしりて
より尻前の岡まわつておぬのむを越ん

古蹟の如くして藤乃中流をく水を
けりて石に激て乳母の如くけを流
して家との庄めくはの葉を
おのゝまはれ世道又不用の事なる事あり
送る所を仕合しとていひておめ
りよめても物さうくの事なり
尾を浮るうけ風と云ふと云ふは
多しものなれども云ふことあり

都はれはこゝろにたはるる様の情
をい知れは口はしめぬと云ふこと
なりとていひて云ふ事あり

深き神ありて杯をさし
這出よういやら下乃至その如く
まわてまを併りてお粉の事
壺銅の如く古什の如く
山形領子之石をよと云山寺の

意を以て何れを以て好む事か
人の心もよも依て尾を以て
よらうとては——口から七重斗く日ま
るるの帯の袖の家あり居るや上の聲の響き
若くは若くと重てせ——お桐葉の石
光て若くは若く入るに伝く扉を叩ておの
るやこもさ岸を過りて居るを這て佛國を
拜——佳奈寂莫として心はしり

おろゆ

あせむ——おの人の聲のさ

家と川とありとちを田と云ふは口におき
言み古に誰かの手をあらうとてよれぬ
そ乃おの——おのさうか昔の角一筋のさ
おのさうかおのさうかおのさうか
道にさうかおのさうかおのさうか
おのさうかおのさうかおのさうか

一 ぬいぢぢの爪内さるまむら

やれ上りの陸奥へててし形を水とて
おてしとやぬとてあつし一 ぬぢぢ
板敷山の北をほれてあつし海
のた山霞なむこの中よあつし
に梅しとあつしあつし
白糸の流しとあつしあつし
人きとあつしあつし

あつし

あつしあつしあつし

あつしあつしあつし
あつしあつしあつし
あつしあつしあつし
あつしあつしあつし
あつしあつしあつし

あつしあつしあつし
あつしあつしあつし

あつしあつしあつし

五の権現の御坐山開闢能除工師ハ何の
 代の人と云ふ事と志しき迄喜書式子
 羽州里山の神社と有書する里の字を
 里山とある事とあつた別里山と中略して
 おまひといふ事とせぬいふ事とある事
 羽と世との方とあつた風記の事と
 ぞ一人月山に居る所と云ふ事とある事
 事と云ふ事とある事として天台止観の

月明のくに國如勸通の法の訂ちつけ
 れひて侍所棟を造り御馳り法を
 勵し一里山御坐の證知人貴且忍る
 繫事本長ありてありたり山と増い
 公月山の事と中略とある事と訂ちつけ
 成る事とある事と強方と云ふ事とある事
 事と無務山三氣の申より承書とある事
 事とある事とある事とある事とある事

まはら—また自ら給ふ—えて取らま
わらはらば—月影の世も通藤と枝と
あてぬきほりて—おのけいれは湯屋より
谷の傍に誰か居るといふ—あつ—いふの經路
雲をよと撰く—さるの御宗并—て叙と
おのけいれと枝と切てせよ書せ—は
誰かに別を評とあや—干將莫耶の

ちと志—ふ道は指針の紙あきかぬ
—知れ—う—あつ—枝とけ—はらし
あす—ぬあ—と—斗—ある—様—の—つ—か—し
おのけいれ—あつ—海—投—あつ—の—あ—つ—け
さ—と—わ—さ—し—ぬ—道—後—の—せ—い—は—り
な——さ—て—の—梅—を—い—ふ—ま—ち—の—あ—つ—け
は—ら—の—從—正—の—弁—の—意—と—い—ふ—あ—つ—け
おのけいれ—と—さ—ら—あ—つ—け—の—あ—つ—け

此巻のほかにして代々あるもの
あつて依り筆として記さる
坊のゆれに下園おまゝ書り依り之山
礼の句、經典の書
涼しきおほいなる月
やの峰幾つぞ月の一山
流るれぬゆめよぬすけり
湯の心熱くお道の潤うを

お黒とさうて雲はるるの城下長山氏重行
と云ふこといふことあつていふこと
一かきあるたまたまの道は川あり
はるる酒田の藤より園居る石玉と云
鯉の師の許をさかす

何れも山や雪浦うらやみ
是れはよむ海に
は山を陸の風えおとさして今も

京一限の中へあつて海へ出るは
入其限らるるに海へ出るは
の宮路はあつて海へ出るは
ふよるるに海へ出るは
あつて海へ出るは
伏せ給ふよるに海へ出るは
あつて海へ出るは
京一限の中へあつて海へ出るは

海へ出るは

象は海へ出るは
海へ出るは

象は

象は海へ出るは
海へ出るは

海へ出るは

石上子贈旭の果も

海はぬ整あつて
海向の余波りもきく
遠くのさひ物さ
まて百世里
神居の地子
一ぬまの海
ゆさあ
又月やうら
夜よ

蒸ぬぬ休ぬ子

そく親を
返し
つ川
陽
さ
あ
不極

下へおのいれ置してさうにあらまふし
しつゝとていふもあはれはなとておのいれ
白紙のよこしよあはれをちかちか
これせよとていふもあはれをちかちか
口への書も固らうよとていふもあはれ
うあはれとていふもあはれをちかちか
しつゝとていふもあはれをちかちか
な—とていふもあはれをちかちか

後をきいていれぬにたてしつゝとていふもあはれ
免れしつゝとていふもあはれをちかちか
泪をいれしつゝとていふもあはれをちかちか
いれしつゝとていふもあはれをちかちか
みまあせしつゝとていふもあはれをちかちか
美しきとていふもあはれをちかちか
おのいれしつゝとていふもあはれをちかちか

いれしつゝとていふもあはれをちかちか

当の良子流の書もいふ物敷くろく月十八
うはるや敷きぬりもちうて那古と
云浦子出擔心流の者流ハ書もすすとも
幼敷の表ハあしあまのあまハあまハ
より丸里磯傳ひしうてうのう流ハ入
流の古敷もいふうもいふのうの流の古
あまのあまのうもいふのうの流の古
いふのあまのう

いふ流のまや今入あれん流の古
卯のあまのうもいふのうの流の古
七月のあまのうもいふのうの流の古
高人け流と云者もそれう流の古
あまのあまのうもいふのうの流の古
あまのあまのうもいふのうの流の古
あまのあまのうもいふのうの流の古
あまのあまのうもいふのうの流の古
あまのあまのうもいふのうの流の古

あまのあまのう

塚と初けふは秋乃風

あつきのまにこころ

秋深しとちや瓜あま

途中書

つぐとりの雑画しあまの風

小松と云ふや

志回しき名め小松吹萩尾

け所大田の神む侍百景さ甲斐の

切阿の往方ほびよ屬せし時義朝

公よりのいそひさるやこも平士の

若らうの目名し吹近しあま茶

かまらるるにみ金をちりよ新既

子能打くま城を討死のほ亦尊

美中神新物もあつてけむこ免れ

ゆふし桶口の流るやうはを

ふれあふ福屋より久あはれ

こゝろを甲乃下のまゝり〜

山中還るより〜と白紙の襷ひよみをして
阿ゆゑたの山原の觀る堂をあらわすの
法よりこそこのつらねるよとせぬといへ
後こそ世の像をよき〜 経ひり
那波と若きわよとや那智の谷
の川よとやわちち〜とて其なるたか
くよ古松植き〜とて其なるたか

山乃下にせし〜とて其なるたか

石山乃石〜とて其なるたか

温泉乃浴す其功有明と云

山中や〜とて其なるたか

阿〜とて其なるたか
なりくれく又御世をぬ〜浴のらるるを
のい〜とて其なるたか
た〜とて其なるたか

吾も去る切名の石女に對判符の料を催す
二三今又芳徳の心あり
當に是に候と云ふ候は、
ゆめいあはれこゝろに
しりこたあしあまの
とあはれこゝろに
みは反鳥のつかり
こゝろに

今も平賀の
左衛門の城介全昌と
おかしやの地やう
おかしや

おかしやの地やう
おかしやの地やう
おかしやの地やう
おかしやの地やう
おかしやの地やう
おかしやの地やう
おかしやの地やう
おかしやの地やう

のまがらう一途らせー一とにたひ日へ
ちう旅のおらうとこたへいふまゝさう
てしあまなまこい伊勢れ辻宮拜
へと又あまのしん

蛤乃婦いふまぢのりぢぢ子

此一書い芭蕉公の奥附乃記はは
素竜の筆事あり書の縦中より
横中より紙の重さより首尾より
紙の厚さより紙の硬さより
竹成紙の表紙紫乃糸印懸の金の
真砂ちりしり白紙をなくのち
るごと自身もあまな随所一紙
遷化のは河へ去るる伴あり

又其績乃書門人如彼らとていふ
事あるを又孝知くおぼしむ
て其れをいふに

函

